

白樺 白樺樹 Берёза

## しらかば

2017年冬号 第39号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでる2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: [hokkaidocenter@dosyakyu.or.jp](mailto:hokkaidocenter@dosyakyu.or.jp)からひと きこくしゃこうりゆう  
樺太帰国者交流パーティーぶん い き なか おも で きょうゆう  
ロシアの雰囲気の中で、思い出を共有

12月23日、東区民センター大ホールにて、帰国者・支援者の皆さんが参加して、来る新年を祝う「樺太帰国者交流パーティー」が開かれました。年末に時期を移して5回目となるこの交流パーティーは、台本、プログラム、そして料理も帰国者によって準備され、ロシア独特の雰囲気味わえる「お祭り」です。

今年はひときわ華やかに、ロマの人々の野営地での祭りをテーマに、ロマの女性に扮した参加者たちが、三頭立てのトロイカに乗ったジエド・マロース(サンタクローズ)や熊、千支の犬とともに賑やかに登場、歌やダンス、古いパーティーを盛り上げました。



お正月はロシアで最も盛大な祝日で、お祝いはおおみそかの夜から始まります。もみの木を飾り、日本で言うサンタクローズにあ

たるジエド・マロースがやってきて、子供たちにプレゼントを配ったりするので、日本人にとってはクリスマスのように



見えますが、クリスマスは年が明けた7日に祝われます。そのため、ロシアでは年末から1月上旬までずっとお祝いムード。お祝いの食卓に欠かせないのは、ペリメニと呼ばれるロシアの水餃子、ハラジェツと呼ばれる煮こごり、日本のポテトサラダに似たオリヴィエサラダなど。今回1000個ほどのペリメニを帰国者有志数名が準備、他の参加者の持ちよりの手料理とともに、ゆでたてがテーブルに並べられました。



この交流会は、帰国者同士の貴重な交流の場でもあります。今回は一時帰国や所沢の定着促進センター入所中の写真を集めたスライドショーが上映され(写真の一部は日本サハリン協会が提供)、懐かしい思い出を皆で共有しました。また日本人の支援者にとっては、帰国者の持つロシア文化を体験する時です。楽しむ時は思い切り楽しむという姿勢に刺激され、はじめは戸惑いながらも踊りの輪に入って、楽しんでいました。



医療・介護特別講座

歯の健康を守るために

12月4日に開かれた医療・介護特別講座の第5回目は「歯と食事と健康」と題して、日の出歯科診療所の

医長孔令群先生にお話を

していただきました。講座の前半は、歯とその病気、歯の健康を守る方法についてのお話、後半は、実際に歯ブラシを使って正しい歯磨きの仕方を学び、先生が個別に指導をしたり、質問に答えてくれました。

食事の後、毎回きちんと磨けない場合はどうしたらいいか、食べた直後に歯を磨くのはよくないというのは本当か、といった質問に対して、寝ているときに一番菌が繁殖するため、夜寝るまえだけでもきちんと磨くように、また歯を傷つける可能性があるのは酢などを大量に摂った場合で、普通の食事ならば問題ない、と先生は答えていました。

「歯の健康」という、誰もが興味のあるテーマについて、疑問を解決し、新しい情報を得ることのできた講座でした。

稚内・地域生活支援推進事業

集まって一緒に活動「私たちサハリン村」



稚内には9家族の樺太帰国者が住んでいます。今年度からセンターがNPO日本サハリン協会稚内支

部に委託して、地域生活支援推進事業として、社会見学会や交流会を行ってきました。帰国者の皆さんは、集まって活動できる場所ができたこと大喜びです。

11月22日、料理講習会が開かれました。講師は今年で3回目の荒岡真喜子先生。帰国者ともすっかり親しく

なり、なごやかに進みます。今回は日本の家庭でもおなじみの巻き寿司、いなり寿司、ちらし寿司を作りました。巻き方が難しい巻き寿司も、楽しく学ぶことができました。そして、試食。おいしいと、賑やかに感想を言い合いながらいただきました。

帰国者の皆さんは、「私たちサハリン村」と、帰国者同士日頃から仲良く行き来して、助け合っているといます。担当する協会の古川さんは、さらに交流の輪を広げたいとがんばっています。

地域に広がる交流

NPOシーズネットが取り組む「介護予防サロン」



札幌のもみじ台団地、手稲前田公園団地で取り組まれてきたNPOシーズネットによる毎月1回の「介護予防サロン」。担当するシーズネットの青木基成さんは、地域で帰国者の皆さんが安心して暮らせるように、地域の住民の皆さんとの交流に力を入れています。もみじ台でも、サロンの常連になった住民の皆さんが、帰国者の皆さんとすっかり親しくなり、笑顔で言葉を交わすようになりました。

手稲前田公園団地でも、自治会の皆さんが参加しています。日頃から顔見知りである帰国者の皆さんと、もっと仲良くなりたいと、いっしょに運動し、終わった後のお茶サロンでは、中国茶とお菓子でおしゃべりを楽しんでいます。言葉でのコミュニケーションが難しいところもありますが、住民の皆さんの理解しようというやさしい気持ちを感じられます。

青木さんは、毎回の「介護予防サロン」に工夫を凝らし、住民との交流、帰国者への理解を地域に広げようと努力しています。



## 白樺り研修旅行 初めての陶芸体験



今年の秋の白樺り研修旅行は、恒例の温泉に加えて、江別市にある「アトリエ陶」で陶芸体験をしました。アトリエの定員の関係で2回(10月23日、10月30日)に分けて行われ、計45名が参加しました。一人に1kgの粘土が割り当てられ、手動のろくろを使って、それぞれ好きな器や鉢などを作りました。

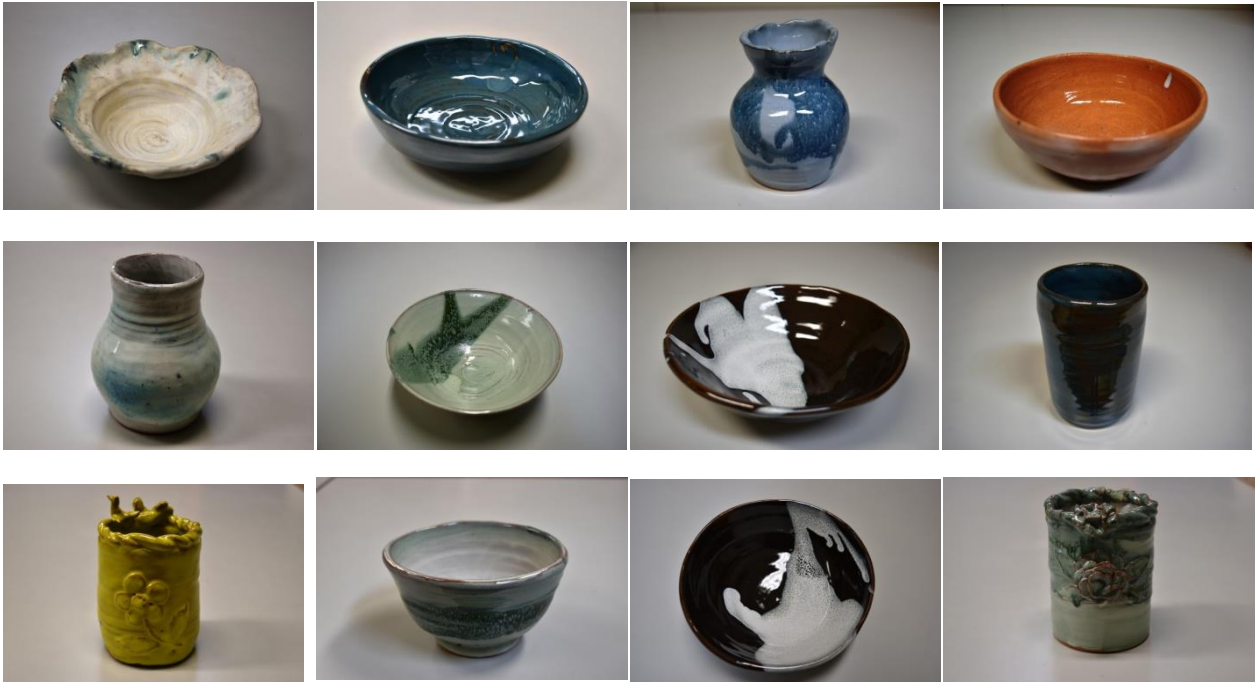
アトリエに入ると、まずはじめに先生にお手本を見せてもらいました。粘土をよく練って、ひと固まりにまとめ、それからろくろを回しながら、親指を粘土の中央に押し当てると、その部分がへこんで器の形になっていきます。先生が指の位置を少し変えるだけで、

自由自在に形を作る様子に、参加者の歓声があがりました。先生がやるのを見ると、いかにも簡単そうに見えるのですが、実際にやってみるとなかなか難しく、思うような形になりません。時々先生に助けてもらいながら、皆さん、自分の欲しいと思う器を作り上げていました。そんな中、中国帰国者のYさんとKさんの二人は楽々と作業を進め、花や鳥などで思いのままに自分の器を飾り付けていました。

初めての陶芸体験でしたが、皆にとって面白い体験となりました。後日焼きあがったものが送られてきましたが、中には自分の作った作品がとても気に入って、毎日のように使っている人もいます。

陶芸体験の後は、温泉「岩見沢ゆらら」でゆっくりとした時間を過ごし、交流を深めることができました。

## ～帰国者による陶芸作品～



白樺 白樺樹 Берёза

稚内・クリスマス交流パーティー  
皆で助け合いながら開催



札幌で交流パーティーが開かれた次の日の12月24日、稚内でも樺太帰国者によるクリスマス交流パーティーが開かれました。

稚内では、センターと日本サハリン協会が協力して進めている「孤立しない拠点作り」の取り組みとして、2015年から稚内市に住む帰国者たちが、自分たち独自の交流会を開き、今回が3回目。28名の参加者の中には、市内の帰国者や支援者のほか、前の日に札幌のパーティーに参加していた二世や旭川市に住む帰国者も合流して、いつも以上に賑やかで楽しいパーティーとなりました。

豪華なシャンデリアのある稚内市日口友好会館は、クリスマスにぴったりの華やかなロシア風の会場。サンタクロースから参加者みんなにプレゼントが配られたあとは、手作りのお料理やおいしいお酒を楽しみながら、ゲームや歌、ダンスで交流しました。また今回は新しいプログラムとして、ロシアのお話として有名な「大きなカブ」も上演されました。劇には帰国者に混じって日本サハリン協会の斎藤会長も娘役で出演。ゲームでは大人たちが子供のころの気持ちに戻って楽しみました。

稚内では今年から、このパーティーのほかにも郷土を知る勉強会や料理・栄養教室、体力増進プログラムなどを帰国者自身が企画して行っています。こうした活動をともに協力し合うことで、帰国者同士の交流がさらに深まり、日常生活でも助け合うようになっています。

(寄稿 日本サハリン協会)

2月・3月・4月の行事

2月9日	健康運動教室
2月11日	中国帰国者新年交流会
3月2日	健康運動教室
3月5日	医療・介護特別講座
3月11日	中国・樺太帰国者を知る集い・学習発表会
3月19日～4月8日	日本語教室春休み



旭川・おしゃべり交流会  
一緒に作り、一緒に楽しむ



12月は「一足早いクリスマス交流会」と名付けて、ボランティアの皆さんを中心に料理交流会を開催しました。中国・樺太帰国者の皆さんが、エプロン姿で一緒に料理を作り、フライドチキンやいなり寿司、サラダにケーキなど、たくさんの料理ができあがって、楽しく交流会は進みました。最後に中国帰国者の林さんがあいさつし、「こういう場所があってうれしい。皆さんの帰国者のために、という気持ちはたいへんありがたく、感謝します」と語りました。

旭川・ボランティア研修会

富山欣也さん、伝えたい思いを語る



10月26日、樺太帰国者問題への理解をテーマに「ボランティア研修会」を開催しました。この日は、樺太引揚と帰国運動の歴史を学んだあと、樺太帰国者富山欣也さんが、その人生を語りました。

伝えたい、話しておきたい、という強い思いがあり、この日のために準備してきたそうです。子供時代、戦争跡の白骨や銃弾を見た記憶、父を亡くし、困窮する生活を助けて乗り越えたこと、製紙工場での30年間の勤務、ソ連時代の厳しい生活など、歴史とともに生きてきた残留日本人の生涯を語りました。